

過疎地と都市周辺部に住む農業従事者の交通行動に関する研究

九州大学工学部 学生員 小山 亮介
九州大学大学院 工学研究院 正会員 大枝 良直
九州工業大学大学院 工学研究院 正会員 吉武 哲信
九州大学大学院 工学研究院 正会員 外井 哲志
九州大学大学院 工学研究院 正会員 松永 千晶

1. はじめに

山間部の過疎地は、全国に比べて第一次産業人口特に農業従事者の占める割合が大きい。過疎地を職業別に詳しく見てみると大きく3つに分けられると考える。農業従事者と農業以外の従事者と無職の3つである。過疎地の研究では、過疎山村における高齢者の生活行動に見られる諸問題の調査¹⁾や高齢者1人暮らし世帯の生活構造・行動・意識の調査²⁾など高齢者に注目した研究が多い。しかし、過疎の研究において農業従事者や農業以外の従事者など職業に注目した研究は少ない。

多くの既存研究では高齢者に注目しているが、本研究では職業として農業従事者に注目する。また同じ農業従事者であっても地理的環境や交通環境の違いによって交通行動や活動頻度は変化すると考えられる。よって本研究では過疎地と都市周辺部の農業従事者の交通行動の調査・比較し、環境の違いによる交通行動の異動を分析する。

2. 調査対象地区について

2-1 対象地区の概要

調査対象地区を図-1に示す。綾町は、宮崎県の中西部に位置し有機農業の町として知られる。農業人口1323人



図-1 綾町と西米良村小川地区
綾町は、宮崎県の中西部に位置し有機農業の町として知られる。農業人口1323人

綾町の18%が農業関係者である。隣接都市である国富町は自動車ですぐ、宮崎市は45分の位置にある。比較対象である西米

2-2 調査概要

平成25年11月に綾町の農家に対しヒアリング調査を行い、個人属性・世帯属性・目的毎の移動時間などを聞き取った。

比較対象である西米良村小川地区は吉武ら³⁾⁴⁾が平成22年10月から平成24年12月にかけてヒアリング調査とアンケート調査を行っている。本研究では、この調査結果を引用する。

3. 調査結果

綾町は49世帯からアンケート回収を行った。綾町、西米良村農家³⁾⁴⁾の個人属性と世帯属性を図-2、図-3に示す。

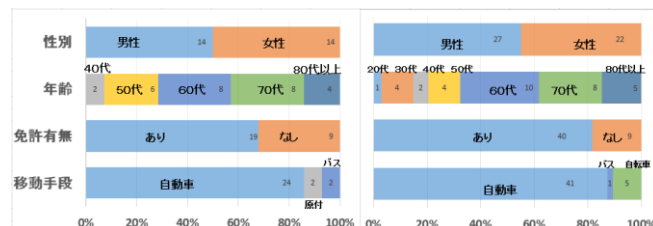


図-2 個人属性（左：小川地区、右：綾町）³⁾⁴⁾

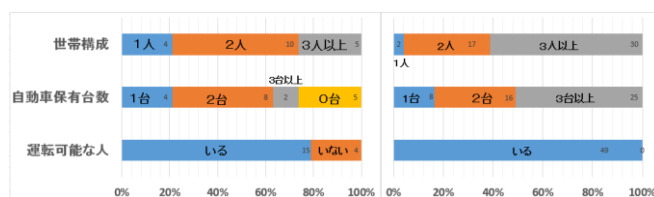


図-3 世帯属性（左：小川地区、右：綾町）³⁾⁴⁾

図-2を見ると、どちらも高齢者の占める割合は多いが西米良村は40代以上しか農業従事者はいない。免許非所有者も小川地区のほうが多い。図-3を見ると、どちらの世帯属性も宮崎県の世帯別平均自動車保有台数である1.26台⁵⁾を上回っている。このことから、農業世帯は一般世帯に比べ自動車の利用率は高いことが言える。しかし、小川地区の場合、非保有世帯が20%以上ある。これらの世帯は70代以上の高齢者の世帯であり、主な移動手段は原付もしくはバス移動になる。次に、綾町と小川地区の農家の目的別移動頻度を図-4に示す。図-4を見る

と、目的の買い物と趣味娯楽において外出頻度が綾町のほうが多くなっている。これは、図-3 に示されるように自動車の利用率が高いことが要因ではないかと考えられる。しかし、通院のみ月 1 回以上外出している割合を見ると、小川地区農家のほうが大きい。これは、図-2 が示すように小川地区が綾町に比べて高齢者の割合が多いためと考えられる。

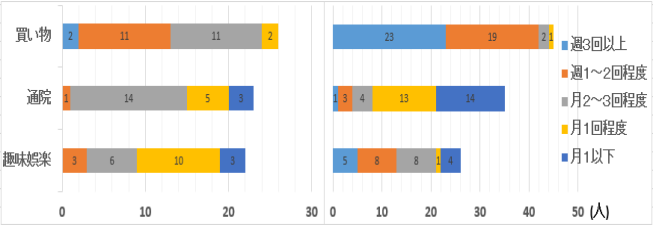


図-4 目的別外出頻度（左：小川地区、右：綾町）³⁾⁴⁾

表-1 移動時間別目的地付近の事業所数と
平均売り場面積(㎡)⁶⁾

		移動時間(分)				
		～15	15～30	30～45	45～60	60～
小川	売り場面積(㎡)	0	0	31	102	138
	事業所数	1	3	21	349	1437
綾	売り場面積(㎡)	76	85	139		
	事業所数	83	269	2727		

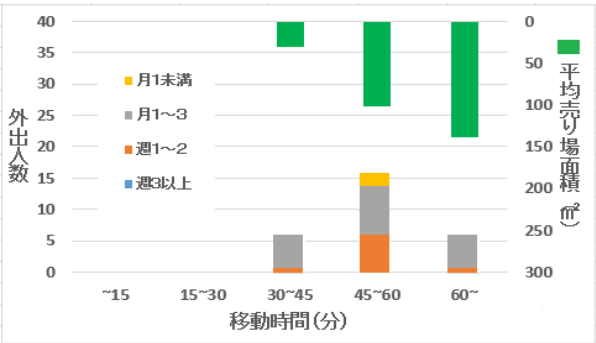


図-5 移動時間別外出頻度および
事業所平均売り場面積（小川地区）³⁾⁴⁾

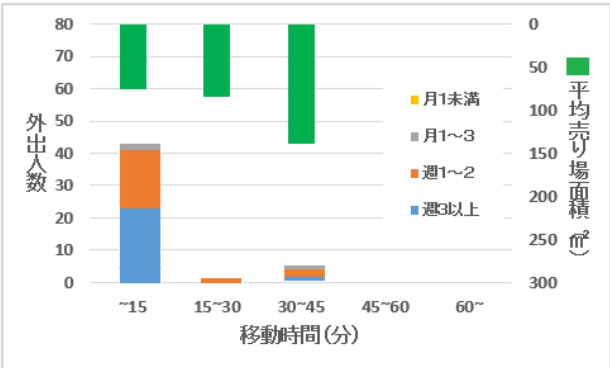


図-6 移動時間別外出頻度および
事業所平均売り場面積（綾町）⁶⁾

次に綾町と西米良村の移動時間別買い物目的地近辺の事業所数および平均売り場面積を表-1、外出頻度と平均売り場面積の関係を図-5、図-6 に示す。

表-1 の小川地区と図-5 を見ると、小川地区の場合は移動時間が短い 30～45 分の場所よりも事業所数と施設規模が充実し始める 45 分以降の場所に多く外出している。すべての人の移動頻度が週 3 回未満であるのは、買い物施設の充実さを求めて移動時間を多くとるためであると考えられる。次に表-1 の綾町と図-6 を見ると、15 分以内と 15 分以上の移動時間で事業所数に大きな差はあるが、施設規模には大きな差がない。事業所数が少ないにもかかわらず多くの人が 15 分以内で買い物を済ませているのは、15 分以内にある施設規模で満足しているためであると考えられる。移動時間が 15 分以内ですむので、週 1 回以上買い物をしている世帯も多いと考えられる。よって、小川地区でも移動時間が短い場所の施設規模を大きくすれば、外出頻度も多くなると考えられる。

4. 考察

小川地区と綾町の外出頻度を比べると、3 つの要素が影響を与えていると考えられる。年齢と移動時間、施設規模である。図-2、図-3 が示すように小川地区は高齢者が多く、自動車を保有していない世帯もあるため、外出頻度が少なくなると考えられる。また表-1 が示すように 30 分以内に買い物をする施設がほとんどないため、移動時間もかかりさらに外出頻度が少なくなる。加えて、充実した施設で買い物するにはさらに移動時間がかかるため、ますます外出頻度が少なくなると考えられる。

5. おわりに

本研究では、環境の異なる農業従事者の交通行動の実態について調査し分析した。地理的環境や交通環境が変化することで、同じ職業でも生活行動が大きく変化することが分かった。また、外出頻度には、年齢と移動時間、外出先の施設規模が影響を与えていることが分かった。今後の課題として、この 3 つの要素がどの程度外出頻度に影響を与えているのかを調査する必要がある。

参考文献

- 1)三谷今日子「過疎山村における高齢者の生活行動 ～島根県瑞穂町の 2 集落を事例として～」地理科学 52(1), 43-59, 1997
- 2)奥田憲昭 「過疎農村高齢者の生活構造・生活行動・生活意識：大分県清川村を事例として」大分大学経済学会 研究所報
- 3)吉武哲信/上永啓太/白石悦二/出口近士「過疎地域での生活システムの構築に向けた人物・物流・福祉系サービス流の実態調査～宮崎県西米良村小川地区を対象として～」第 32 回交通工学研究発表会論文集
- 4)吉武哲信/青野航典/白石悦二/出口近士「過疎地域における生活支援のための人物・物流・サービス流の複合システム構築の可能性・バスへの物流の結合を中心として」第 33 回交通工学研究発表会論文集
- 5)一般財団法人 自動車検査登録情報協会 「マイカーの世帯普及台数」(平成 25 年 3 月末現在)
- 6)経済産業省 平成 19 年商業統計メッシュデータ